

# 平成25年度 医学振興银杏会総会開く



受賞者一同と岸本理事長

平成25年度の医学振興银杏会総会は、5月25日に银杏会館にて開催された。雲一つない青空の下、佐多・楠本両博



第236号

公益社団法人  
医学振興  
银杏会

(編集同人)

川越裕也 荻原俊男  
門田守人 米田正太郎  
杉本 央 武田雅俊  
朝野和典 木村 正  
黒木尚長

士の胸像に役員が献花(写真2面)を行い、級会・支部交流会において、各地の支部・級会・学内からの参加者が同窓会活動の近況を報告しあった。

総会は早石雅有副理事長の司会で開始され、書面による議決権行使を含め全代議員389名中71.4%の273名の参加を得て本総会が成立したことが報告された。岸本忠三理事長は、公益社団法人である当会は同窓会の役割に加えて、広く医学・医療の発展に貢献する使命を担っており、本学・他学出身者も、また准会員である若者から年配の会員まで、全会員が力を合わせて学友会の一層の発展に協力頂きたいと挨拶された。昨年の総会以後の113名の物故者へ黙祷を捧げ、勲章受章者・学術賞表彰者への慶祝の意が表された。

公益社団法人の議事として、渡邊幹夫理事より平成24年度

の事業・会計報告、阿部源三郎監事より監査報告が行われ承認された。続いて平成25年度の事業計画・予算案が説明された。任期満了に伴う次期役員と、来年の代議員改選に向けた選挙管理委員会の設置も承認された。引き続き、地域医療に関する研究助成の採択者4名と岸本基金奨学助成金の採択者14名、学友会奨学金の採択者16名への授与式が行われた。

総会の後は、生命機能研究科教授の難波啓一先生が「ナノスペースでの生命のしくみ」と題して、鞭毛のモーター機構をはじめとする各種生体構成分子の機能構造解析の実際を、動画をふんだんに用いてご講演された。続けて金田安史医学系研究科長、大橋一友保健学科教授、目加田英輔微生物病研究所長、濱田博司生命機能研究科長から、学内の現状が報告された。その後場所を银杏クラブに移し、所用で遅れて参加された吉川秀樹附属病院長の現状報告を伺いつつ、歓談のうちに全ての行事を終了した。

## 研究助成の公募

当会では、今年度も公益事業の一環として、下記の研究助成を行います。

連絡先 (FAX) 06-6879-3503  
(メール) office@ichou.med.osaka-u.ac.jp

### ▶地域医療に関する研究助成

対象 地域医療に貢献している病院・施設で行われている疾病の診断・治療に関する研究をしている若手研究者(40歳未満)への助成

募集期間 9月1日~11月30日

助成額 1件50万円程度

助成件数 3~4件

### ▶平成25年度国際学術交流助成(後期分)

内容 外国で行われる国際学会等(9月1日~平成26年3月31日の間に行うもの)において成果発表をされる若手研究者への渡航費用助成。詳細は当会ホームページhttp://ichou.or.jp/をご覧ください。

募集期間 10月1日~11月30日

## 第25回シンポジウム

### 『地域医療の課題とその対策』開催のご案内

開催日 平成25年10月18日(金)午後3時開会  
会場 银杏会館3階 阪急・三和ホール  
テーマ 「国のがん対策と地域医療連携」  
基調講演 門田守人先生(がん研有明病院 院長)  
講演後、演者・コメンテーター・参加者によるディスカッション  
懇親会 银杏会館2階 レストランミネルバ

(要旨) 2007年、がん対策基本法が施行、それに基づき国の第一期「がん対策推進基本計画」が閣議決定され、翌年より各都道府県で基本計画が策定、全国的にがん対策が推進されてきた。5年が過ぎた昨年6月、第二期がん対策推進基本計画が閣議決定され、本年度より都道府県において第二期目のがん対策が始まったところである。現在の計画では①がん死亡率の20%減少、②がん患者の療養生活の質の向上、③がんにも関わらず安心して暮らせる社会の構築を全体目標として掲げている。この達成には地域医療連携は必須であり、皆さんと共にこの課題について考えてみたい。

※参加ご希望の方は、事務局までお問い合わせ下さい。

平成24年度秋の叙勲

瑞宝中綬章 橋本 一成先生 (昭28)  
 瑞宝中綬章 田中 修二先生 (昭33)  
 瑞宝中綬章 小倉 剛先生 (昭35)  
 瑞宝小綬章 桂田 菊嗣先生 (昭35)  
 瑞宝小綬章 原 弘道先生 (昭40)

平成25年度春の叙勲

旭日大綬章 植松 治雄先生 (昭30)  
 瑞宝中綬章 森 透先生 (昭36)  
 瑞宝中綬章 高杉 豊先生 (昭43)  
 瑞宝小綬章 森本 靖彦先生 (昭36)  
 旭日双光章 善成 務先生 (昭29)

叙 位

従四位 松本 圭史先生 (昭28)  
 (平成25年2月3日ご逝去)

平成24年度受賞

日本医師会医学賞 仲野 徹先生 (昭56)  
 大阪科学賞 古川 貴久先生 (昭63)  
 持田記念学術賞 熊ノ郷 淳先生 (平3)

平成25年度受賞

高松宮妃癌研究基金学術賞 森 正樹先生 (昭55・九大医)  
 文部科学大臣表彰科学技術賞 吉森 保先生 (昭56・阪大理)

寄 附 御 礼

当会の事業へご寄附をいただき、誠に有難うございました。

平成25年4月23日

大阪大学同窓会連合会より、7万円をご寄附頂きました。

平成25年4月23日

岸本基金奨学助成金事業のため、岸本忠三先生(昭39)より、1,500万円をご寄附頂きました。

※公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は、個人・法人とも税金控除の対象となります。詳細に関しては、当会事務局までお問い合わせください。

新 役 員

(任期：2013年5月25日より2年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時社員総会の終結のときまで)

役 職	卒業年次	氏 名
理事長	昭39	岸本 忠三
副理事長(総務)	昭42	早石 雅宥
副理事長(財務)	昭42	山西 弘一
副理事長(事業)	昭43	荻原 俊男
理事	平09	藤本 裕司
理事	昭51	目連 晴哉
理事	昭53	三木 善次
業務執行理事(学術)	昭56	米田 悦啓
理事	昭57	馬場 雄造
業務執行理事(広報)	長崎大医・昭59	朝野 和典
業務執行理事(助成)	昭59	栗木 宏実
理事	昭60	黒木 尚長
理事	昭60	梶本 佳孝
業務執行理事(情報)	昭60	北川 透
理事	昭63	山本 晴子
業務執行理事(学術)	平04	森井 英一
理事	気象大・平04	桑田 成規
業務執行理事(会計)	平05	渡邊 幹夫
業務執行理事(庶務)	平05	三好 智満
理事	平18	西尾 啓
監事	昭18	阿部源三郎
監事	昭41	越智 隆弘
監事	昭51	杉本 央
監事	昭56	山口 時雄
監事	平05	藤本 美穂
顧問	昭54	吉川 秀樹
顧問	昭55	金田 安史

代議員選挙について

現代議員の任期は来年の定時社員総会終結をもって満了いたします。詳細につきましては、代議員選出管理委員会からの公示文書、同封別紙「立候補・候補者ご推薦のお願い」をご覧ください。



公益社団法人 医学振興银杏会役員による献花

公益社団法人 医学振興協会  
正味財産増減計算書

平成24年4月1日から平成25年3月31日まで

(単位：円)

科目	前年度	当年度	当年度内訳		
			公益目的事業	共益事業	法人会計
<b>I 一般正味財産増減の部</b>					
<b>1. 経常増減の部</b>					
(1)経常収益					
基本財産運用益	3,049	3,056	3,056	0	0
特定資産運用益	293,796	191,762	190,202	1,560	0
受取会費	26,360,000	27,325,000	15,750,000	4,775,000	6,800,000
事業収益	819,000	5,160,200	562,000	4,598,200	0
受取寄附金	479,000	258,000	233,000	25,000	0
受取寄附金振替額	14,462,242	14,855,008	14,855,008	0	0
雑収益	358,863	235,626	235,626	0	0
他会計からの繰入額	0	0	0	0	0
経常収益計	42,775,950	48,028,652	31,828,892	9,399,760	6,800,000
(2)経常費用					
支払助成金	21,660,000	22,100,000	21,900,000	200,000	0
支払寄附金	1,000,000	0	0	0	0
地域医療ネットワーク費	1,561,451	740,553	740,553	0	0
通信運搬費	1,976,727	4,054,577	344,845	3,150,059	559,673
印刷製本費	1,899,396	6,379,545	1,343,029	4,906,520	129,996
コンピューター費	61,872	120,651	120,311	0	340
給与手当	9,118,119	9,620,888	5,772,533	962,089	2,886,266
退職給付費用	970,000	440,000	264,000	44,000	132,000
福利厚生費	1,932,877	2,448,602	882,249	147,041	1,419,312
旅費交通費	447,600	445,500	263,950	43,740	137,810
消耗什器備品費	380	0	0	0	0
消耗品費	5,293	4,524	2,559	0	1,965
修繕費	25,200	400	0	0	400
光熱水料費	113,846	136,747	68,374	0	68,373
支払手数料	630,599	578,957	122,190	2,780	453,987
減価償却費	1,319,151	188,549	139,709	0	48,840
会議費	1,069,373	994,954	0	0	994,954
研修費	18,000	0	0	0	0
新聞図書費	8,000	10,800	0	0	10,800
雑費	56,580	30,001	0	0	30,001
経常費用計	43,874,464	48,295,248	31,964,302	9,456,229	6,874,717
評価損益等調整前当期経常増減額	△ 1,098,514	△ 266,596	△ 135,410	△ 56,469	△ 74,717
基本財産評価損益等	0	0	0	0	0
特定資産評価損益等	0	0	0	0	0
投資有価証券評価損益等	0	0	0	0	0
評価損益等計	0	0	0	0	0
当期経常増減額	△ 1,098,514	△ 266,596	△ 135,410	△ 56,469	△ 74,717
<b>2. 経常外増減の部</b>					
(1)経常外収益					
固定資産売却益	50,000	0	0	0	0
経常外収益計	50,000	0	0	0	0
(2)経常外費用					
固定資産売却損	1,358,280	0	0	0	0
経常外費用計	1,358,280	0	0	0	0
当期経常外増減額	△ 1,308,280	0	0	0	0
当期一般正味財産増減額	△ 2,406,794	△ 266,596	△ 135,410	△ 56,469	△ 74,717
一般正味財産期首残高	89,538,095	87,131,301			
一般正味財産期末残高	87,131,301	86,864,705			
<b>II 指定正味財産増減の部</b>					
受取寄附金	16,500,010	15,000,000	15,000,000	0	0
一般正味財産への振替額	14,462,242	14,855,008	14,855,008	0	0
当期指定正味財産増減額	2,037,768	144,992	144,992	0	0
指定正味財産期首残高	0	2,037,768			
指定正味財産期末残高	2,037,768	2,182,760			
<b>III 正味財産期末残高</b>	89,169,069	89,047,465			

ホームページでも公開しております。ホームページアドレス→<http://www.ichou.or.jp/joho.html>

助成事業採択者一覧(敬称略。平成25年5月25日総会にて授与式を執り行いました)

1. 平成24年度 地域医療に関する研究助成、4件、各50万円

金本隆司：超音波診断装置を用いた膝蓋骨の動きの定量的評価法の開発と利用ー膝前十字靭帯再建術及び人工膝関節全置換術の術後リハビリテーションにおける活用ー

佐藤 崇：顔面神経麻痺に対する新規治療薬となりうる神経再生因子の解明

西田健太郎：より安全な人工視覚システムの開発

吉田栄宏：初代培養スフェロイドを用いた筋層非浸潤性膀胱癌の再発・進展リスクの予測

2. 平成25年度 学友会奨学金 16件、各20万円

学部学生：相川恵梨子、磯野友美、梶谷憲司、康利章、月橋重矢子\*、野瀬陽平、橋本剛志、藤井浩平、本田亨、松野達哉 (\*…後日辞退)

大学院生：伊藤篤子、國吉佳奈子、城本悠助、宋智勲、濱谷紀彰、米倉洋平

3. 平成25年度 岸本基金奨学助成金採択者 14件、1年次：60万円、2年次～6年次：120万円

(1年次) 入里直樹、阪井耕一、竹中乃由利、武中稜 (2年次) 小林政雄、寺本将行 (3年次) 島上洋、田村有里 (4年次) 城戸介介、田中

和典 (5年次) 原田昭和 (6年次) 梅田大介、松原昌平、渡邊優子

4. 平成24年度 国際学術交流助成 13件、各10～20万円

飯沢まさみ(寄重症・独)、川村匡(心血外・喫)、阪上由香子(精神医・加)、谷田司(消化外・米)、中森雅之(神経内・仏)、波多祐紀(形成外・典)、森口悠(整形外・喫)、阿部裕仁(寄運動・米)、鎌田創吉(心血外・米)、坂田宗平(統生理・米)、辻井芳樹(消化内・蘭)、中間千香子(老腎内・豪)、Wiriyasermkl Pattama(シ薬理・米)



# 松本圭史先生を

## 偲ぶ会が開かれました

本年2月に御逝去されました名誉理事長の松本圭史先生を偲ぶ会が、病態病理学教室と当会との合同で、平成25年5月26日にリーガロイヤルホテルにてしめやかに執り行われました。寺田信行兵庫医科大学名誉教授の司会で、教室代表として森井英一教授、友人代表として垂井清一郎名誉教授、門下生代表として佐藤文三日生病院名誉院長がお別れの言葉を捧げられました。森井教授は、ステロイドの生化学的研究で病理学に新しい手法を先駆的に取り入れたことをはじめとする業績を紹介し、また医学部長としての吹田への移転など大学やご退官後の多くの組織の管理運営にも手腕を発揮されたことを紹介されました。垂井名誉教授は、誰に対しても心を開き、常に優しい微笑を口元にたたえ、本音で話をする、頼りになる友人であったと故人を偲ばれました。佐藤名誉院長は、恩師への長年の指導に対する感謝を述べられると共に病室での様子を紹介され、参列者一同の胸にも再び悲しみがこみ上げました。

参列者が御遺影に献花した後、

早石雅育副理事長の司会で、岸本忠三理事長の発声による献杯が行われました。松本圭史先生のご縁の深い先生方の中から、平野俊夫総長、井村裕太郎京都大学名誉教授、島崎淳千葉大学名誉教授、阿部源三郎監事、青野敏博徳島大学名誉教授、青笹克之名誉教授が、在りし日の松本圭史先生との思い出を壇上で語られました。若き日の精力的に研究・教育をされていた様子、対立する意見を的確に調整解決されていたこと、常に細やかな気配りと共に激励を受けたこと、関し松本カラムを用いたステロイド研究、シオノギ癌やホルモン依存性癌のこと、研究を共に行ったことや学会での交流、学友会や医師会で大変お世話になったこと、暖かい目を持って指導を受けたこと、節目でアドバイスを頂戴したことなど、数多くの思い出と感謝の念が披露され、これらのお話は先生のお姿を彷彿とさせるとともに、もうお会いすることのできない寂しさを改めて痛感することとなりました。

松本圭史先生の御冥福をお祈り致します。



# トピックス

## 想定外の出来事

年々ともには頭は固くなつていく、とは昔から言われていることである。私たちは食道癌は食道粘膜上皮細胞から、胃癌は胃粘膜上皮細胞から、大腸癌は大腸粘膜上皮細胞から発生すると考えている。最近、男性の食道癌患者さんの手術標本を調べる機会があった。この患者さんは食道癌手術の数年前に血液疾患を患い、その際、妹さんから骨髄移植を受けていた。食道癌の癌細胞の性染色体を調べてみると、癌細胞周囲の間質細胞はX染色体とY染色体から成っているが、癌細胞はX染色体のみから成っていた。これはこの患者さんの食道癌は妹さん由来の骨髄細胞から発生したことを示している。骨髄移植された細胞が食道粘膜に移動し、そこで癌に変化したのであ

うか。あるいはどこかの骨髄で癌になった後で、食道に居つき食道癌として認められるようになったのであろうか。少なくとも本人の細胞以外から来た細胞が癌の起源であることは間違いないように感じる。

癌の間質を構成する細胞がひよっとしたら癌細胞かも知れない、この話も衝撃的であった。最初の詳細な論文はKim *et al.*の乳癌での論文のように思う。乳癌の癌間質細胞が癌細胞と同じように、p53やPTENの mutation を有していたとの内容である (Nature Genetics 2002)。最近になって脳腫瘍でも Wang *et al.*が癌幹細胞様細胞が Notch シグナルによって内皮前駆細胞に分化し、さらにこれらが VEGF 刺激によって血管を形成

する (Nature 2010) との報告を行った。すなわち癌細胞が間質の血管細胞を構成しているところをわけてみる。 Carcinoma と言われる癌でもひよっとしたら同様のことが言えるのかもしれない。山中教授の4個の遺伝子で iPS 細胞ができる、この研究成果も、莫大なデータを一つずつ根をつめて探求してきた研究者には、結果に辿り着くまでのスピードとたった4個の遺伝子というシンプルなお点で驚異的なことだったのであろう。他方、癌細胞に山中4遺伝子を入れるとどうなるか？ 私たちは実験してみた。正常細胞と同様に多能性を有する細胞 (iPC細胞) になるが、不思議なことに腫瘍形成能力がなくなってしまった。機序は十分に解明できていないが、思いがけない結果である。

以上の癌細胞の由来、癌間質細胞の由来、多能性幹細胞の作製に関する話は、われわれの固定概念を破る、想定外の出来事である。実験の重要性や、物事を柔軟に考え、そして受け入れる度量の重要性をあらためて示している。すなわち頭を柔らかく維持することが必要だ。固定概念から

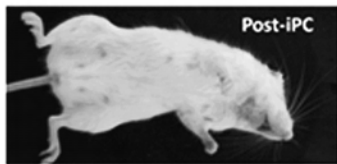
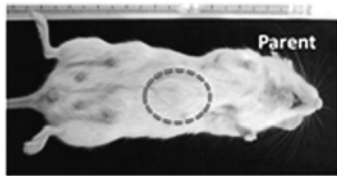
すると、にわかには信じがたいと思ふ事柄も、人間の体はもともと一個の精子と卵子が

受精してできた受精卵からできていることを考えると、何

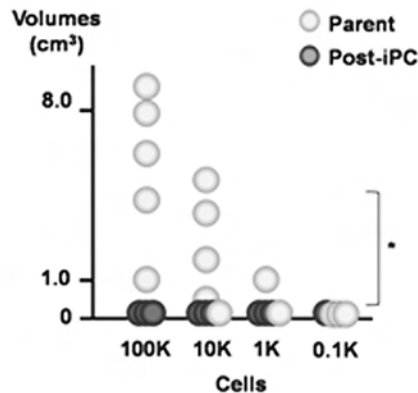
のだから。消化器外科学 I 森 正樹 (昭55・九州大医)

## iPC 細胞は造腫瘍能を失くす

A



B



提

言

2025年問題という言葉... 2025年問題という言葉を時々耳にする。2025年には団塊の世代が一斉に後期高齢者(75才以上)になり、

医療費などの社会保障費の急増が懸念されている。後期高齢者は、2010年の1400万人から、2025年には2200万人になり、逆に生

産年齢人口(15~64才)は2010年の8200万人から7200万人に減少する。減少した生産年齢者が増加した後期高齢者を支えることにな

る。後期高齢者の増加に伴い、死亡者数も2004年100万人から、2015年140万人、2025年160万人と増加する。

2025年問題は非常に広範なので、医療・介護に限ってみても多数の難問が存在する。

現在、看取りの場所は病院

が78~80%、介護施設が1%、自宅が12~13%である。死亡者が増加した場合、今のままでは病院での死亡が増加し、病院における救急医療の問題

者は、2012年から2025年に看護師数で145万人から200万人に、介護職員を150万人から240万人に増やす必要があるとシミュ

2025年問題

が再び登場しないであろうか。

また、医療費の増加にも繋がるであろう。後期高齢者が増えれば、当然疾病をもつ人も増加する。これらの事に対応するには、医療・介護従事

レーションされている。人の充足が必要となり、医療介護費用が増加するのは当然のことである。同時に医療・介護のシステムの構築が必要であ

医療・介護のシステムのひとつとして在宅医療・介護がいわれている。しかし、一人の医師が24時間対応するのは不可能である。そして、在宅ケア地域包括ケアシステムの構築、診療所間でのチーム医療が言われているが、独立した診療所が何か所かでチームを組むのはほぼ無理ではないかと思う。在宅ケアを中心に置いた多数の医師の所属する診療所なら24時間対応は可能であろう。一方法である。フランスの在宅入院制度、我が国

の尾道方式なども参考となる。現在、社会保障制度改革国民会議、社会保障審議会医療保険部会をはじめとして、検討が進められている。しかし、選択肢が限られていると思う。サービスの絞込み、保険料アップ、税金の投入増加などである。いずれにしても、道は険しく、時間が迫っている。 米田正太郎(昭45)



...その137

阪大病院で診療をつづける一人の患者として、私は、あるカンファレンスルームにいました。そこでは、内科、外科、放射線科などの専門医が集まり、合同症例検討会が開かれていました。私が希望して特別に出席が許されたのでした。患者本人であると紹介されて、検討会は始まりました。それぞれの専門医により、率

直な意見交換が行われました。私は、納得して、手術を受けた決心をしました。「患者中心の医療」が提唱されて久しくなります。「患者中心の医療」といっても、いろいろな視点があります。

診療の形態という観点から見れば、前述のような患者参加型の医療も、一つの姿でありえましよう。また、治療対象とそれに対するアプローチという観点からは、「疾病」そのものの治療のみでなく、病気を患う「人間」の診療へと軸足を移すことになります。そこでは、「医療面接」によ

阪大病院に通院する

患者として

族やコミュニティなど患者

を取り巻く状況や、これまでの生活史、人生観、死生観など、患者の心情を十分理解した「家庭医療」が実践される。とともに、患者同士の「友

れま。一方、患者と医師との人間関係から捉えれば、「患者中心」ということは、とりもな

す。看護師、薬剤師などの医療専門職と患者との関係にも同じことがいえます。医療社会学者のタルコット・パーソンズは、医療の社会を、「合議制(同僚制)協働体」と考えました。異なった専門知識技術をもつ人たちが、互いに信頼し、尊敬しあって、共通の目的にむかって協働する組織と理解されます。医師も、それらの仲間(同僚)の一人として患者を囲むことになりま。そのような立場に立つ医師こそが、仲間から、そして、患者からも信頼される「明日の医師」なのではない

独立行政法人国立病院機構南和歌山医療センター名誉院長 森脇 要(昭36)



診	紹
療	
科	
	介

# 放射線治療科

本診療科は、1990年4月に大阪大学医学部附属バイオメディカル教育研究センター集学放射線治療学研究部として発足いたしました。2001年4月には、バイオメディカル教育研究センターが解消され、生体統合医学専攻 生体情報医学講座になりました。そして、2005年4月に大阪大学大学院医学系研究科 内科系臨床医学専攻 放射線統合医学講座 放射線治療学教室となりました。その間、初代井上俊彦名誉教授、第2代故井上武宏教授の卓越した御指導のもと、大阪府のみならず日本の放射線治療における臨床・教育・研究において極めて重要な役割を果たしてまいりました。

近年、癌の治療に対して放射線治療が大変注目されるようになってきています。その理由として、癌患者の増加や「切らずに治す」ことができるようになった放射線治療の急速な進歩が挙げられます。実際の臨床現場においても、特に前立腺癌、肺癌、子宮頸癌、頭頸部癌、食道癌などの疾患については、早期であれば放射線治療を行うことにより手術と同等の治療率が期待できるようになってきました。従いまして、より質の高い放射線治療を提供するために、当科は大阪府の中核となるばかりでなく、全国でもトップレベルの放射線治療科となるべく診療の向上に努めております。治療内容としては、通常の外部照射はもとより、頭頸部癌、婦人科癌、前立腺癌に対する小線源治療を行うとともに、強度変調放射線治療やサイバーナイフによる定位置照射（ピンポイント照射）などの高精度放射線治療にも力を入れていきます。近年、粒子線治療（陽子線や炭素線）やホウ素中性子捕捉療法が注目されていきますが、大阪府下にも粒子線治療装置やホウ素中性子捕捉療法を導入すべく、大阪大学として検討を行っております。そして、大学病院として、他の病院では行っていないような新しい医療、すなわち先進医療を推進し、今までは治療が難しかった疾患についても治療を可能にしたいと考えております。

放射線治療の研究に関しては、大きく臨床研究、医学物理研究、放射線生物研究の3つに分けることができます。臨床研究については、様々な癌の放射線治療における研究を行っています。特に精神的に行っているのは、前立腺癌と子宮頸癌の研究です。前立腺癌については、高線量率組織内照射単独による前立腺癌治療における至適線量分割の確立、画像誘導放射線治療による高精度外部放射線治療についての研究を行っています。子宮頸癌については、局所進行子宮頸癌に対する新規化学放射線療法の開発、高線量率

組織内照射の効果・安全性の検討、子宮頸癌術後全骨盤照射に対する強度変調放射線治療についての研究を行っています。医学物理研究については、現在までにマルチリーフコリメーターの精度管理に関する検討、コンビームCTを用いた画像誘導強度変調放射線治療における位置精度の検討、異種計画画像融合ソフトによる線量最適化等の研究を行っています。また、放射線生物研究については、細胞周期の違いによる放射線感受性の検討や、様々な細胞における放射線による細胞生存曲線モデルの最適化の研究を行っています。また、基礎系研究室の先生方との共同で、生体イメージングや癌幹細胞と放射線感受性についての研究を開始しています。これらの3つの研究を精力的に進めていくことにより、至適と考えられる放射線治療法の確立を目指していきたいと考えております。

このような形で今後とも、臨床・研究の充実を図り、新時代の要請に応える質の高い医療の提供を行い、さらには大阪の地でしか実現できない独創的研究を展開し、その成

果を日本そして世界に発信していきたいと考えております。今後とも、皆様のご指導、ご生にお願ひ致しました。

次は消化器外科の森正樹先生  
小川和彦（平3・千葉大医）  
鞭撻を賜れば幸いです。

子捕捉療法を導入すべく、大阪大学として検討を行っております。そして、大学病院として、他の病院では行っていないような新しい医療、すなわち先進医療を推進し、今までは治療が難しかった疾患についても治療を可能にしたいと考えております。

放射線治療の研究に関しては、大きく臨床研究、医学物理研究、放射線生物研究の3つに分けることができます。臨床研究については、様々な癌の放射線治療における研究を行っています。特に精神的に行っているのは、前立腺癌と子宮頸癌の研究です。前立腺癌については、高線量率組織内照射単独による前立腺癌治療における至適線量分割の確立、画像誘導放射線治療による高精度外部放射線治療についての研究を行っています。子宮頸癌については、局所進行子宮頸癌に対する新規化学放射線療法の開発、高線量率

組織内照射の効果・安全性の検討、子宮頸癌術後全骨盤照射に対する強度変調放射線治療についての研究を行っています。医学物理研究については、現在までにマルチリーフコリメーターの精度管理に関する検討、コンビームCTを用いた画像誘導強度変調放射線治療における位置精度の検討、異種計画画像融合ソフトによる線量最適化等の研究を行っています。また、放射線生物研究については、細胞周期の違いによる放射線感受性の検討や、様々な細胞における放射線による細胞生存曲線モデルの最適化の研究を行っています。また、基礎系研究室の先生方との共同で、生体イメージングや癌幹細胞と放射線感受性についての研究を開始しています。これらの3つの研究を精力的に進めていくことにより、至適と考えられる放射線治療法の確立を目指していきたいと考えております。

このような形で今後とも、臨床・研究の充実を図り、新時代の要請に応える質の高い医療の提供を行い、さらには大阪の地でしか実現できない独創的研究を展開し、その成

